

# 徳島県下における横穴式石室の一様相

— その 2 —

学 芸 員 天 羽 利 夫

## は じ め に

ここに報告する標題の調査研究は、先に『徳島県博物館紀要』（第4集・1973年3月発行）で述べた「徳島県下における横穴式石室の一様相」の続篇である。

徳島県博物館では、館活動として1971年から遺跡調査を実施してきた。その目的は史跡指定されている古墳や、その他学術上、保存上重要と考えられる古墳について、墳丘や石室の実測調査を行い、研究及び展示活動の一助にすることで始めたものである。

現在までに実施した調査は、つぎのとおりである。

1971年3月 県指定 宝幢寺古墳 鳴門市大麻町池谷字勝明寺谷11の1

1971年8月 穴不動古墳 徳島市名動町1丁目

1972年2月 県指定 矢野の横穴式古墳 徳島市国府町西矢野山林39

1972年8月 観音山古墳 那賀郡羽ノ浦町中庄字千田池33

1973年2月 県指定 弁慶の岩窟 小松島市芝生町大嶽8の2

1973年3月 国指定 段ノ塚穴・棚塚 美馬郡美馬町坊僧368

1974年8月 国指定 段ノ塚穴・太鼓塚 美馬郡美馬町坊僧373

1975年3月 県指定 北岡西古墳 阿波郡阿波町北岡74の2

1976年3月 県指定 北岡東古墳 阿波郡阿波町北岡252の2

1976年8月 忌部山古墳群 麻植郡山川町山崎字忌部山123

これらの古墳のうち、宝幢寺古墳が前方後円墳（内部主体不明）であるほかは、すべて後期古墳・円墳・横穴式石室である。このことは、県内の研究活動と無関係ではない。とくに徳島考古学研究グループが前方後円墳の実測を手がけていたため、前方後円墳の集成は同グループにゆだねる結果となり、当館の調査は後期古墳に主眼をおくこととなったからである。

宝幢寺古墳の調査成果は、立花博「遺跡調査概報—宝幢寺古墳の実測—」『徳島県博物館館報』12号（1971年7月）に報告されている。また、穴不動古墳の調査から以降、棚塚までの調査については筆者が前掲書『徳島県博物館紀要』第4集に報告してある。ここに報告する遺跡は、棚塚については重複するが、棚塚・太鼓塚、北岡東・西古墳の4古墳である。

これらの調査にあたっては、美馬町・阿波町両教育委員会、ならびに両町文化財保護委員会の方々、徳島考古学研究グループの会員諸氏、各土地所有者には惜しみないご協力やご指導を賜わった。また願勝寺、最明寺、先川千代子氏には宿舎を、鎌田肇氏、岩佐啓二氏には休憩の場をそれぞれ提供していただいた。ここに改めて御礼を申し上げる次第である。

また、本稿執筆に際し、岡山真知子、天竹勉、三宅良明の各氏には、図面整理、トレース、遺物実測などをしていただいた。銘記して感謝する次第である。

# 1. 段ノ塚穴

指 定 地 美馬郡美馬町坊僧 363—366, 368—370, 372—375

管 理 者 美馬町教育委員会

国 指 定 年 月 日 1942年10月14日

調 査 期 間 棚 塚 1973年3月14日～25日 太鼓塚 1973年8月19日～9月4日

調 査 協 力 池内千秋, 石丸洋, 井上りえ子, 岡本坦, 岡山真知子, 片岡芳彦, 喜多明敏, 北川右二, 小林勝美, 篠原広志, 立花聡, 橋野義治, 浜田義明, 松崎みさ, 松永住美, 三井淳子, 宮崎和重

美馬町教育委員会, 美馬町文化財保護委員会

願勝寺, 佐藤信雄, 篠原正臣

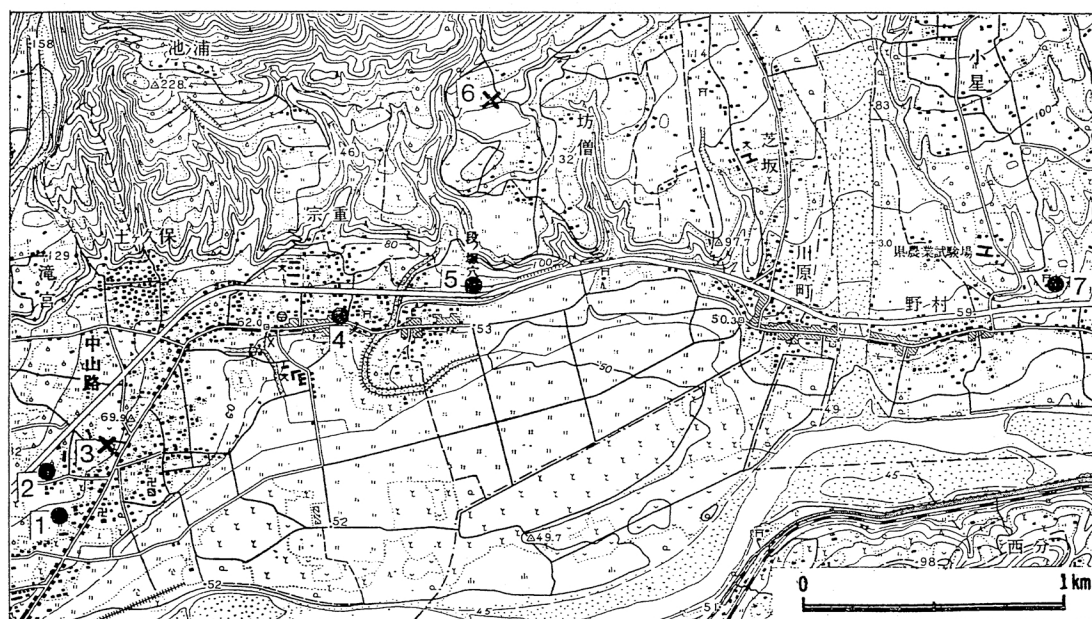
城東高等学校郷土研究部 (阿部洋一, 井内やよい, 大石良隆, 川田友子, 角地博, 滝山雄一, 武知千秋, 外磯賢二, 林慎二, 広瀬昌幸, 不藤三知子)

辻高等学校郷土研究部 (浅田須美子, 安宅章美, 上野幸子, 大西和洋, 黒田京子, 坂本洋子, 福原ケイ子, 藤本祝子, 三木秀樹, 宮内陽子)

## 1. 遺 跡 の 位 置

段ノ塚穴は、東墳の太鼓塚と西墳の棚塚とを総称した呼び名で、地元民には家具賃伝説などで親しまれた古墳である。考古学的には、特色ある巨大な横穴式石室を有することで注目され、笠井新也氏らによって早くから学界に紹介されてきた。註(1)

行政区画では、太鼓塚の墳丘は美馬郡美馬町坊僧373番地にあたり、棚塚は同坊僧368番地を中心とする。



第1図 段ノ塚穴と周辺の主な遺跡(2万5千分の1, 『貞光』) 1. 願勝寺1号古墳 2. 井川古墳  
3. 郡里廃寺 4. 真鍋塚 5. 段ノ塚穴 6. 坊僧池瓦窯 7. 野村八幡古墳



第2図 空からみた段ノ塚穴

朝日新聞社提供

段ノ塚穴は旧撫養街道沿いの河岸段丘上にあつて、段ノ塚穴という名称も立地そのものを形容している。この周辺はいうに及ばず、吉野川上流域は、とくに河岸段丘や扇状地の発達したところで知られており、現集落もこれらの上に発達がみられる。この地域の古墳は、ほとんどがこれら河岸段丘や扇状地の先端に立地する。

段ノ塚穴の立地する段丘は、それほど奥深くなく、北から南へゆるやかに傾斜する段丘の中ほどから先端にかけて立地する。太鼓塚の直前に数年前県道バイパスが新設され、段丘先端との旧地形は失なわれてしまったが、現状よりさらに南へ10m前後距離はあったと思われる。

段丘下を開ける水田地帯との比高は約20mで、前方の吉野川流域を広々と見わたすことができる。二つの古墳の並ぶ様子は、吉野川の南岸からでもはっきり確認できるほどである。

この段ノ塚穴周辺には重要な遺跡がみられる。東へ2.3kmのところに段ノ塚穴型石室で石棚をもつ野村八幡古墳、西へ0.5kmで段ノ塚穴型石室の真鍋塚がある。また、白鳳期の寺院址で知られる国指定史跡郡里廃寺（立光廃寺ともよぶ）は直線距離にして西へ約1.5km隔てたところである。郡里廃寺の北方は、美馬郡衙推定地でもある。郡里廃寺の瓦窯である坊僧池瓦窯は、段ノ塚穴から北へ0.7kmほどのところにある。このような遺跡分布を周辺の状況と比較してみると、この地域が、6世紀から7、8世紀にかけて吉野川上流では最も重要な役割を演じていたことが推定できる。とりわけ、段ノ塚穴に限ってみても古墳時代後期を語るには欠かせない。

## 2. 墳丘とその現状

東墳の太鼓塚、西墳の棚塚ともに円墳で、墳丘の保存状態は比較的よいが、裾周辺はかなり削り取られており、とくに両古墳とも南側は墓地造成のため破壊されている。古墳のまわり一面は、水田や畑地でよく耕やされており、民家は隣接しない。

いずれも封土は完全な盛り土と考えられる。太鼓塚の墳丘は、現状では東西で37m、南北で33mとなり、東西に長い楕円形を呈している。これは、墳頂部から東斜面にかけてみられる崩れのため、直径約34m前後の円墳が推定できる。

また石室入口の天井部周辺も崩れがひどく、調査時には南端の天井石が露出し、南へずれ落ちてい

たが、昭和48年度国庫補助事業として天井石の復元と羨道部入口側壁の修復が行なわれ、現在では様相を一転している。県教委文化課立花博主事のご教示によると、工事に際して天井部上面を削り取ったときの封土は、粘土とこぶし大ないしはそれよりも小さめの砂岩礫を混ぜ合わせてつきかためた状態であったという。また円筒埴輪が出土したともいう。太鼓塚の墳丘には、あちらこちら人頭大の砂岩礫が露出しているが、これが葺石であるかどうか確定できていない。

棚塚はこの太鼓塚から北西側に位置し、その間の距離は墳丘裾で27mである。石室奥壁中央での両者の距離を図上で計てみると56mである。

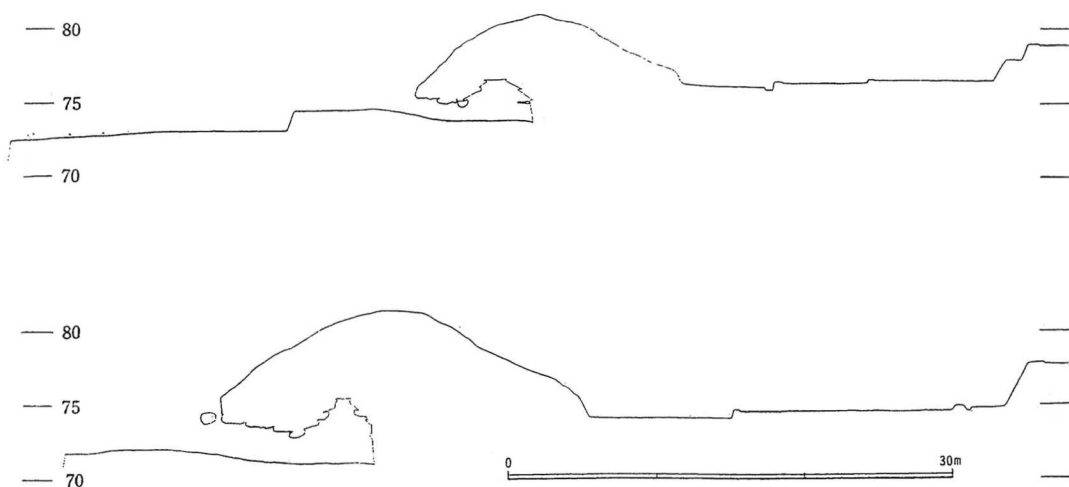
棚塚は直径約20m前後の円墳と考えられる。墳頂部がやや平坦になっているほかは保存がよい。裾部が方形を呈しているが、墳丘の保存状態からみてまず円墳に間違いのないであろう。

つぎに高さをみてみよう。太鼓塚の墳頂は標高81.533m、棚塚の墳頂は80.925mである。標高差で0.6m太鼓塚が高い。仮りに太鼓塚の床面レベルを71.15m、棚塚73.75mとすると、墳頂と石室床面との比高は、太鼓塚が10.383m、棚塚が71.75mとなる。

墳頂部と四周の水田との高低差は、太鼓塚では西7.9m、北7.4m、東9.4m、南10.0m、棚塚では西6.8m、北4.6m、東6.0m、南6.4mである。

また石室床面レベルと四周との差は、両者とも床面レベルが低く、太鼓塚では西2.4m、北2.9m、東0.5m、南0.8m、棚塚では西0.4m、北2.6m、東1.1m、南0.78mである。したがって、現状でみるかぎり、太鼓塚では石室床面レベルと最も近い数値は東側で、棚塚では西の水田である。

段ノ塚穴と後で述べる石室との関係は、第3図、第4図に示す通りである。ここで特に注目しておきたいのは、両墳とも玄室奥壁中央が墳丘中央部とほぼ同じ位置で築造されていることである。石室主軸線は太鼓塚がN-2°-E、棚塚がN-11°30'-Wである。



第4図 段ノ塚穴墳丘断面図 上 棚塚 下 太鼓塚

(数値は海拔m)



### 3. 石室の構造と規模

**太鼓塚** この石室は全長 13.10m、高さ 4.25m とまったく壮大な石室という言葉につきる。これほど隅々まで心にくいほどの配慮がなされている石室は他に例をみない。石室は緑泥片岩を用いて築き、砂岩はほとんど使わない。巨石をふんだんに使っているのも特徴の一つである。一つ一つの石の面が壁面の傾斜に合わせて積まれているため、壁面は凹凸もなく、調和のとれた石室を創作している。天井石、石梁、玄門石は河原石で、壁面の石はいずれも割り石を用いている。

奥壁からみていくと、床面からの高さ 2.63m、巾 3.07m で、石梁を床面から 1.65m のところに 1 本入れ、それを境に奥壁は、上段と下段に分かれる。石梁の厚さは 40cm、壁面での長さ 2.6m、両端は両側壁に入る。表面は丸味をおび、20cm ほど奥壁面より張り出している。形態からみて、棚の役割はたさない。

この石梁の上段と下段で、石積み様子は異なっている。下段の積み石は全体に大きく平積みとし、上段はレンガ状の小さな石を小口積みにすると同時に、平積みも折り混ぜている。

下段は、大きいもので巾 90cm、厚さ 15～20cm、一番多いのは巾 60cm ほどの石である。床面ほどに大きい石を捉え、石梁近くに 30～40cm の小さい石を積む傾向がみられる。上段はほとんどが巾 30～40cm 厚さ 10cm 前後の石を小口積みにしている。上段、下段とも奥壁は、石梁を除いて、側壁に両側から挟み込まれた格好で築かれている。

つぎに、玄室側壁を見ていく。玄室側壁は大きく分けて、四段階の作業工程が把握できる。

第 1 段は石梁の下端部と玄門石の上端を結ぶ線までで、床面から 1.6～1.7m の高さである。つまり奥壁の下段と同様である。この段階では、比較的大きい石を選び、巾 0.9m、厚さ 0.3m 前後のものを多用する。とくに、床面直上には大きい石を配し、さらに奥壁との隅には巾 1.5m、厚さ 0.7m の巨石を置く。この時点で、玄門石ならびに奥壁の下段もすでに完了している。

第 1 段終了後は、奥壁に石梁と玄門部天井石を捉え、第 2 段階に入る。玄門部天井石の高さは床面より 1.75m である。側壁第 2 段は奥壁上段と同じ工程である。第 2 段の下端には、とくに大きな石を選び積み込んでいる。西壁ではわずかる個の石で奥壁から玄門部天井石の間を埋めている。第 2 段の上端は、床面から 2.85m の高さ（第 5 図 D）である。つまり 1 枚目天井石の上端を結ぶ位置である。側壁の内傾する度合がこの段階で大きくなる。1 枚目の天井石をそれぞれ架けて、第 2 工程は終了する。

つづく第 3 段は、床面から 3.6m までの高さまでである。つまり、2 枚目天井石の上端までである。3 段階での石材はとくに薄く長いものが選ばれている。2 枚目の天井石を捉え、この工程は終了する。

第 4 段階は、最後の仕上げで、側壁を最終まで積み、3 枚目の天井石を架け、中央部に最後の天井を水平に捉える。最高部の高さは床面から 4.25m である。これで玄室の構築は完了する。

つぎに、羨道部側壁を見てみよう。羨道部側壁が、もちろん、玄室部側壁の進行状況と歩調を合わせていることは当然考えられる。羨道部は 3 段階の工程が認定できる。

まず第 1 段階は、玄室第 1 段階と同じ玄門石上端の位置まで側壁を積み、羨道部入口側では床面か

ら約1.8mの高さで、少しその位置は高くなっている。床面直上にまず、巾1.0～1.5m、厚さ0.5～0.8mの巨石を並べ、その上部、とくに玄門石よりの壁面には巾0.8m、厚さ0.3～0.4mの厚みのある石を選び積む。羨道部の場合、工程に関係なく平積みを基本とする。第1段を終了すると玄門部天井石が架けられる。第2段は、羨道部1枚目の天井石（玄門部より数えて）までの高さまで積む。床面から2.1mぐらいの高さである。この段階で1枚目の天井石を捉える。この天井石は玄門部天井石の上に乗せている。つまり玄門部天井石には玄室と羨道部の両方の天井石が乗る。これらを支える重要な柱が玄門石なのである。

最後に第3段階では目的とする天井面までの側壁を積み終え、その上端に2枚目、3枚目、4枚目の天井石を順次架けて行く。入口に向って、天井石は次第に高くなっていくが、天井石はそれぞれ持ち送らない。床面からの天井石の高さは1枚目が2.1m、2枚目が2.33m、3枚目が2.45mである。4枚目の天井石は前方に移動しており原位置ではない。今ではこの天井石は修復され、3枚目に接して架け変えられている。

羨道部に使われた天井石は大きく、1.5～2m以上の巨石である。このように天井面が入口になるにつれて高くなるのと同時に、羨道部の巾も大きく開いていく。

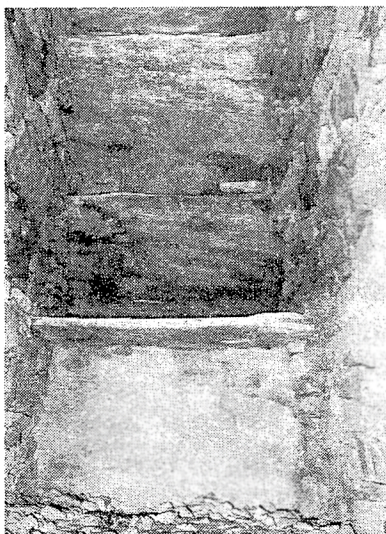
つぎに平面プランをみていこう。羨道部入口附近は玄室に比べて80cmほどの土砂が堆積しており、厳密には床面での幅は比較できない。玄門部幅は1.3m、玄門石と羨道側壁との接点での幅は1.6m、その接点から入口に向かって1.5mのあたりで1.43m幅と狭くなるが、そこから急に開いていく。入口では2.04m（但しBプランの位置）の幅となる。羨道部壁面は、あまり内傾しないので、床面でもこの数値に大差ないであろう。

玄門部は玄門石の大きさが異なるため、若干東壁と西壁に差が生じている。東玄門石の幅は1.0m、西は0.83mである。羨道部側壁と玄門石の接する位置は、東西ともほぼ同じである。したがって、玄門石の幅の差は玄室側でその差を見せてくる。このことは、玄門部天井石の位置にも関連し、天井石が主軸に直交するのではなくやや斜めになるという結果がみられる。玄門石と玄室側壁との接点から奥壁までの長さは、東壁で4.6m、西壁で4.77mである。その接点間の巾は2mで、玄室中央両壁の幅は3.38m、奥壁では3.07mとなる。つまり玄室平面プランは胴張りで、まさしく太鼓塚と呼ぶ名のとおりである。

**棚塚** 棚塚は、天井石、玄門石、奥壁、棚に緑泥片岩の巨大な河原石を使い、側壁には緑泥片岩の割り石を主体に、和泉砂岩も合わせて用い、平積みを基本として構築している。奥壁、天井石は扁平な石がとくに選ばれているため、玄室は整然としている。砂岩は、玄室・羨道とも床面から50cm位の高さまでに多用している。石室全長は8.65mである。

奥壁は、緑泥片岩の1枚石を据え、いわゆる鏡石とする。巾1.95m、高さ1.46mでやや前かがみに傾く。この奥壁に接して、石棚が設けられている。床面から1.2mの位置に水平に架け、両端は両壁に組み込まれている。このことから、側壁の構築と同時に設けられていたことが判る。石棚は、厚いところで15cmの緑泥片岩の板石が選ばれている。

つぎに側壁をみると、太鼓塚のように作業工程は明確でないが、大体3段階に分けられる。第1段



第7図 棚塚の奥壁

階は、玄門部天井石の上端と奥壁上端とを結ぶあたりで、1.6m前後の高さである。この段階のなかにも、石棚を附設する過程で前後に細分できると思うが、側壁面から明確にうかがうことができない。この段階では、巾0.8~1.0m、厚さ0.2~0.3mの厚味のある石を中央部に配している。この段階は玄門部天井石の設置で終わる。

第2段階は1枚目天井石の上端までで、床面から、2.1mのところにあたる。玄門部側天井石の上端が、奥壁側のそれよりも20cmほど高い位置にあたる。使用された石は第1段階のものよりやや小さいが、顕著な差は認められない。1枚目の天井石を据えてこの段階は終了する。

第3段階は、最高部天井面まで側壁を構築し、2枚目の天井石を据え、さらに中央部に最後の天井石を架けて、玄室は完了する。

玄室中央部の天井面までの高さは、床面から2.8mである。玄室の斜めに架けた4枚の天井石は、いずれも30度前後の傾斜で一致している。石の大きさは、1.5m前後であろう。

羨道部側壁は、2段階に分けることができそうである。第1段階は玄門部から数えて1枚目天井石の下端までで、高さは1.2mあたりまでである。つまり、この1枚目の天井石を置く工程である。

第2段階は、2枚目の天井石を架けて完了するまでの工程である。この天井石は1枚目の天井石の上に乗せており、太鼓塚と同様である。その高さは1.54mである。入口部が、高く広く開口するのも太鼓塚とよく似ている。

最後に平面プランをみていく。玄室は末広がりの形態である。玄門部の幅は0.85m、玄門石と玄室側壁との接点間の幅1.35m、中央で1.9m、奥壁で1.95mとなる。中央から奥壁にかけて、両側壁はほぼ平行線をたどっている。玄室の長さは4.50mである。

玄門石の位置は左右対称でない。立石の形態の違いによって、まるで片袖式の玄室であるかのようなプランを示す。留意しておきたいのは、玄門石と羨道部側壁との関係である。東壁の壁面は、立石と同じ位置まで張り出して築かれている。そのため、玄室との関係で均斉のとれたプランを示さず、羨道部が主軸線に対して東よりにずれた格好を呈している。

太鼓塚と棚塚を比較してみると、玄室長さは10cmほどのわずかの差であるが、玄室巾、高さ、羨道部長さに大きな格差がみられる。棚塚の石室でさえ、段ノ塚穴型石室のなかでは最大級であることからすれば、いかに太鼓塚の被葬者の権力が絶大であったかをうかがわせる。

#### 4. 出 土 遺 物

段ノ塚穴出土品として伝えられている遺物は、現在美馬町郷土博物館に保管されている資料だけである。津田快洞氏のご教示によれば、つぎのような状況で発見されたとのことである。

その一つは、1951年から1953年頃笠井新也氏、津田快洞氏らが発見したもので、太鼓塚羨道入口から西へ15mのところに碑があるが、その前方から一括で大量の須恵器と馬具が出土した。これらの遺物は、石積みでまわりを囲われていたという。同じ頃、津田快洞氏によって、墳丘東南端から埴輪が発見されている。その位置は、羨道部入口から東に長く墓地がつづいているが、墓地の東端あたりとのことである。

つぎに、1960年9月、曾我部文夫氏によって太鼓塚玄室から鉄製品の一群が発見されている。太鼓塚の石室内から明らかに出土した遺物は、この資料のみである。

出土位置からみて、津田氏らの発見した須恵器、馬具の一括資料は太鼓塚に関するものと推定できるが、石室から出土したものを再び埋め戻したものなのか、もともと墳丘周辺に副葬したものなのか判定は難しい。したがって、現時点で須恵器、馬具に関しては、参考資料として紹介するにとどめておきたい。

##### 須恵器 (第8図 No.1～17, 第9図 No.18～24)

今まで確認した数は89個体で、器種は蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・碌・長頸壺・広口壺・台付長頸壺・提瓶・甕・蓋等にわたっている。主なものは、2～3類に分類でき、しかも時期的な幅も大きい。全個体にわたる検討ができていないので、現状における整理報告にとどめておきたい。

##### 蓋 坏 身12 蓋12 (No.1～5)

器形により2類に分けられる。Ⅰ類は、身に受けがあり、たちあがり内傾し、器高が低いものである。Ⅱ類は、Ⅰ類の身と蓋が逆転し、蓋に返りがつき、乳頭状のつまみをもつものである。数量的には、Ⅰ類が身10・蓋10、Ⅱ類が身2・蓋2である。

Ⅰ類 (No.1～3) 蓋は口径12.3～13.2cm、器高3.3～4.1cm、身は口径10.3～11.5cm、受け部径13.2～14.1cm、器高3.4～4.5cmの法量をもつ。ヘラ記号をもつものが5セットあり、×・Ⅱの記号が身・蓋の底部・天井部につけられている。

No.1は、口径11.5cm、受け部径14.1cm、器高3.8cm。たちあがりは低く内傾しており、浅い底となっている。右回りに巻き上げ、右回転を利用して成形している。底部外面はヘラ削りを6回施し、内面には回転方向のハケ目調整が認められる。口縁部周辺は内外面ともヨコナデで調整されている。

No.2は、口径12.4cm、器高3.7cm。天井が低く、口縁がやや開く。左方向へ巻き上げ右回転を利用して成形している。天井部外面に7回のヘラ削りが認められる。口縁部内外面はヨコナデで調整されている。

このNo.2とセットをなす身No.3についてみてみたい。口径10.8cm、受け部径13.5cm、器高3.9cm。No.1よりもたちあがり高いが底はさらに浅い形を呈する。左回りに巻き上げ、右回転を利用して成形している。底部外面はヘラ削り、内面は回転方向のハケ目調整が認められる。口縁部周辺は内外面ともヨコナデで調整されている。

Ⅱ類（No 4・5）蓋は口径6.4・10.2cm，稜径11.0・12.3cm，器高2.9・3.5cm，身は口径11.9・11.9cm，器高3.3・3.7cmで，Ⅰ類より小さい。

No 4は口径10.2cm，稜径12.3cm，器高3.5cm。返りが低く直立する形で，乳頭状の径1cmの小さなつまみがつくのが特徴である。右方向に巻き上げ，右回転を利用して成形している。内面及び口縁部外面はヨコナデ調整，外面はヘラ削りを5回施している。

No 5は，口径10.6cm，器高3.3cm。かなり扁平な薄いつくりで，底部の中央がやや凹む形を呈している。

#### 有蓋高坏 高坏25 蓋15 （No. 6～9）

高坏はよく似た形態であるが，脚の透かし窓によって2類に分けられる。Ⅰ類は，透かし窓が3方向に上下2段ついたもので，Ⅱ類は2方向に上下2段ついたものである。Ⅰ類は24点，Ⅱ類は1点である。

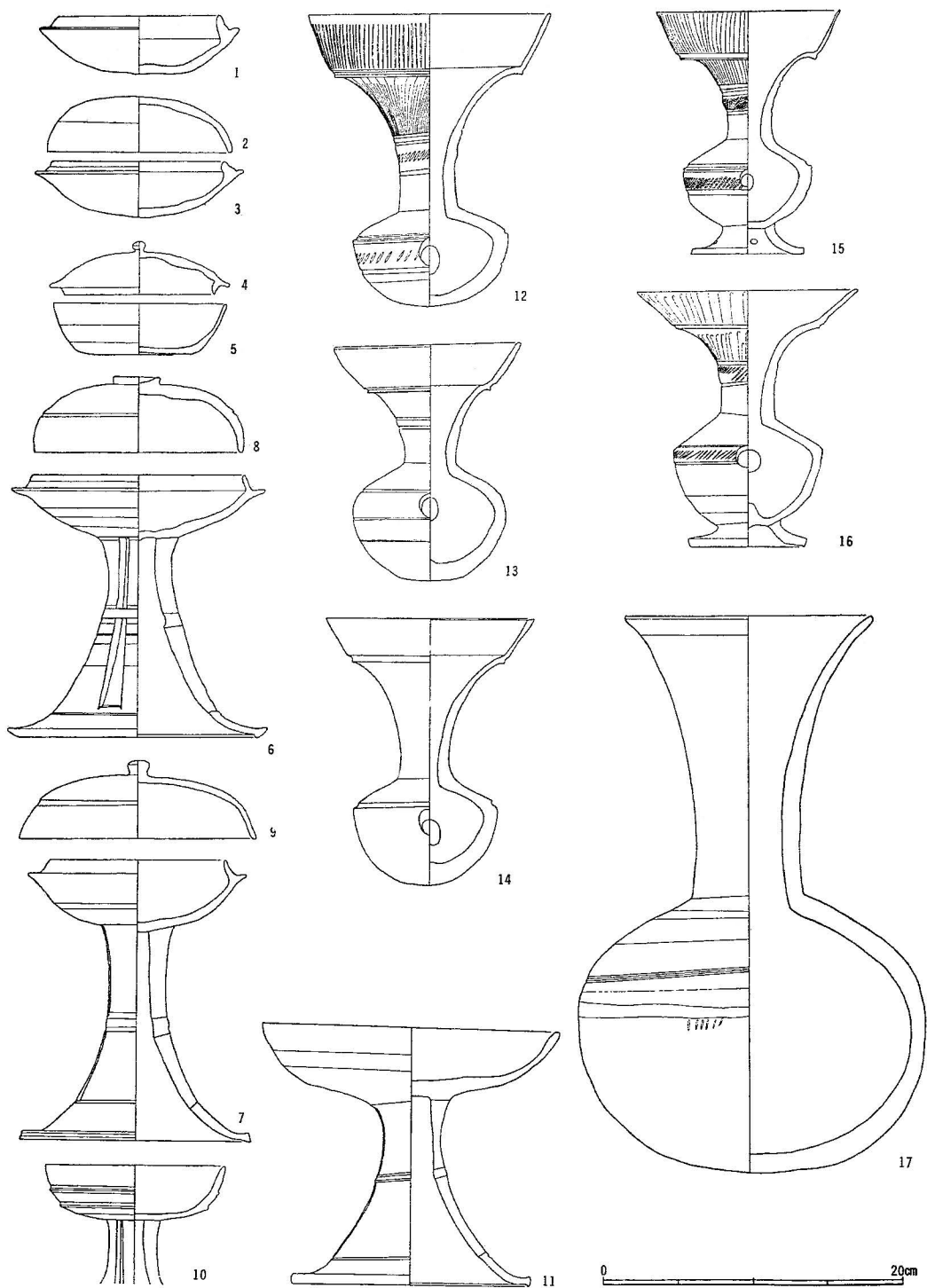
Ⅰ類（No 6）口径14.3cm，受け部径17.1cm，器高17.8cm，底径16.0cm，脚径5.5cm，脚高13.5cm。坏部の形態は，蓋坏のⅠ類と酷似している。たちあがりは低く，内傾し，浅い坏部で，長い脚をつけている。脚部は，沈線をヘラ先で基部に1条，脚中央に3条，端部近くに1条めぐらし，そのあとで透かし窓を3方向にあげている。透かし窓は，上段が長方形，下段が縦長の台形を呈し，鋭い切れ込みで形づくられている。また，脚は少なくとも7帯の粘土帯から成り，内外面ともハケ目調整で，端部は大きく外反する。

Ⅱ類（No 7）口径11.7cm，受け部径14.6cm，器高18.9cm，底径15.5cm，脚径4.9cm，脚高14.5cm。Ⅰ類と同様，坏部の形は，低く内傾するたちあがりで，内面をよくヨコナデで調整された浅い器形を呈する。Ⅰ類より坏は小さいが，脚が逆に高い。また，坏に脚を貼り付けており，脚部には透かし窓が2方向に上下2段あいている。透かし窓の上下にヘラ先沈線が3条めぐり，脚端部にもヨコナデ沈線が1条めぐり，端部はやや内傾している。

有蓋高坏の蓋はつまみの形から2類に分けられる。蓋坏と比べると，肩に沈線をめぐらす点やつまみをもつ点に違いがある。なお，この蓋はⅠ類の高坏とセット関係にあると考えられるが，現在はまだ明確にはできていないので，蓋だけについてみたい。a類は，つまみが扁平で中央が凹む形のもので，径3cm前後のものが多く，b類は，つまみが高くなり，中央部が丸くなったり，尖ったりするもので，径2cm前後のものが多く。

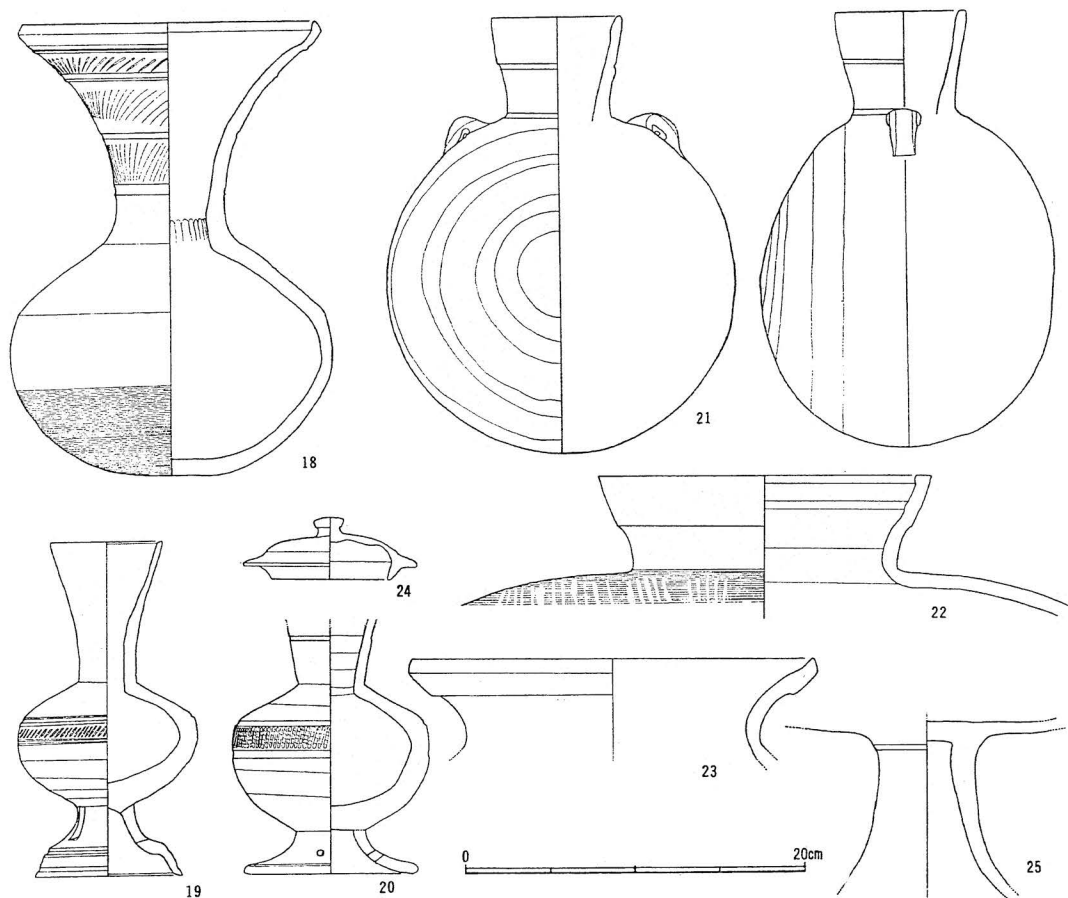
a類（No 8）口径14.0cm，器高5.1cm，つまみ径3.2cm，つまみ高0.5cm。口縁端が直立し，やや深めの器形を呈する。肩部には2mmの細く鋭い沈線が入る。つまみは，中央部が4mmも凹み，薄い扁平な形である。左回りに巻き上げ，右回転を利用して成形している。外面は天井部にヘラ削りが8回施され，口縁端及び内面はヨコナデ調整で仕上げている。

b類（No 9）口径15.9cm，器高5.3cm，つまみ径1.4cm，つまみ高1.0cm。口縁が少し外反し，肩部に4mmの太い沈線をめぐらす。天井部に，先の丸い太いつまみを有し，やや下がった所にAのヘラ記号が入る。左回りに巻き上げ，右回転を利用して成形している。



第8図 段ノ塚穴出土遺物 (1) 須恵器





第9図 段ノ塚穴出土遺物 (2) 須恵器 18~24 土師器 25

#### 無蓋高坏 4 (No. 10~11)

坏部の形態、脚の透かし窓によって2類に分けられる。Ⅰ類は、口縁があまり外反せず、やや深めの坏部を有し、3方向の2段透かしの脚部をもつ。体部に沈線・隆線をめぐらし段をつけているのが特徴的である。Ⅱ類は、口縁が大きく外反する浅い坏部を有し、2方向の2段透かしの脚部をもつ。Ⅰ・Ⅱ類とも2点ずつである。

Ⅰ類(No10) 口径12.0cm, 脚径3.7cm, 坏部高3.6cm。小形の比較的深めの坏部で、肩部に沈線・隆線で段をつけたのを2か所にめぐらしているのが特徴的である。これらはヘラ先で鋭くつけられている。底部はヘラ削りで、内面はヨコナデ調整である。脚下半部欠損のため、3方向透かし窓があいていること以外は不明である。

Ⅱ類(No11) 口径19.9cm, 器高17.2cm, 底径15.8cm, 脚径5.4cm, 脚高12.4cm。口縁部が大きく外反し、浅い底の坏部である。脚も高さのわりに開きが大きく、端部は直立する。2方向に上下2段の透かし窓があげられ、透かし窓の上下には細いヘラ先沈線がつけられている。口縁部内外面及び脚端部はヨコナデで調整されている。



疎 10 (No. 12~19)

台の有無によって2類に分けられる。Ⅰ類は台をもたないもので、器形によってa・b・cに分けられる。Ⅱ類は高台をもつもので、a・bに分けられる。Ⅰ類aは2点、bは2点、cは3点、Ⅱ類aは2点、bは1点である。

Ⅰa類(No12) 口径16.3cm, 器高19.7cm, 胴径10.4cm, 頸径4.0cm, 頸高9.0cm。体部はやや肩のはった形で、頸部が大きく外反し、頸高は長い。口縁部もやや外反しながら、端部は丸くなる。また口縁部、頸部上半には櫛状工具による平行線文がみられ、頸部中央と体部中央にヘラ先の斜平行線文が施されている。文様帯間にはヘラ描沈線が必ず入り、計6条に達する。また隆線が沈線と組み合わせて、口縁部と頸部の境に1条、体部に2条みられる。円孔は、横1.5cm, 縦2cmの縦長に鋭く切り込んで穿たれている。

Ⅰb類(No13) 口径12.5cm, 器高16.0cm, 胴径10.3cm, 頸径3.6cm, 頸高4.8cm。口縁は外反し、a類より深めの丸い体部に、やや短かめの頸部をもつ。口縁は外反し、端部は丸くなる。ヘラ描沈線が、頸部との境に1条、頸部中央に2条、体部に3条めぐっている。また、頸部との境の沈線の下に隆線をめぐらし、明瞭に段としている。沈線・隆線以外の文様は退化して無い。円孔は径1.5cmでやや縦長に穿たれている。

Ⅰc類(No14) 口径14.0cm, 器高18.0cm, 胴径9.6cm, 頸径3.8cm, 頸高7.8cm。b類にあった頸部の沈線がなくなり、口縁と頸部の境、体部だけになるものである。左回りに巻きあげ、右回転利用による成形がみられ、底部はヘラ削り、その他の部分はヨコナデ調整によっている。円孔は、長径1.7cm, 短径1.5cmの楕円形に穿たれている。

Ⅱa類(No15) Ⅰa類の疎に小円孔を3つ穿った台をつけたものである。口径12.4cm, 器高16.3cm, 胴径8.6cm, 頸径3.2cm, 頸高5.3cm, 底径7.5cm, 台高1.9cm。疎の形態はⅠa類に酷似しているが、頸部中央、体部中央に櫛描列点文がみられ、体部肩の隆線を沈線の間にはさむ点に相違点がある。円孔は径1.2cm。台は内面ハケ目、外面ヨコナデで調整され、径1.2cmの円孔が3ヶ所穿たれている。

Ⅱb類(No16) 器形は、Ⅰc類によく似ており、これに台をつけたものである。口縁部の $\frac{1}{2}$ を欠損し、しかも口縁部が歪んでいるので口径・器高は不明。胴径9.9cm, 頸径3.7cm, 頸高6.0cm, 底径7.5cm, 台高1.5cm。口縁が大きく外反し、体部の肩が張る形を呈する。が、Ⅰc類と異なり、口縁部・頸部上半に櫛描平行線文を施し、頸部中央、体部中央に櫛描列点文が沈線の間には施されている。台は低く、疎に貼り付けている。体部下半はヘラ削りで、他はヨコナデ調整である。円孔は径1.5cmでやや横に広い形で穿たれている。

長頸壺 1 (No17)

口径16.4cm, 器高37.3cm, 胴径23.2cm, 頸径7.6cm, 頸高18.9cm。ほぼ完形で、出土須恵器中最大のものである。口縁が外反し、頸部が直立する形で、どっしりとした体部をもつ。口頸部は少なくとも16帯の粘土帯を巻き上げてつくられ、そのあとヨコナデで調整している。体部は左右不均衡で下部が大きくなる。胴部には細い沈線が2条めぐられ、その下には平行叩き目の痕跡が認められる。また、指で押さえた痕跡も認められるなど、底部のつくりはかなり雑である。

### 広口壺 1 (No.18)

口径17.2cm, 器高26.9cm, 胴径19.0cm。頸部が外反し, 口縁端部が直立する器形を呈する。頸部外面には, ヘラ・櫛による施文がみられ, その間には沈線・隆線がつけられている。体部は胴部の大きいどっしりとした形で, 底部下半はカキ目成形, 肩部はヘラ削りで調整している。なお, 肩部は口頸部と体部の接合部にあたり, 内面には指頭圧痕が認められる。

### 台付長頸壺 3 (No. 19~20)

台の形態により2類に分けられる。Ⅰ類は3方向に1段透かし窓をあけるもので, Ⅱ類は, 3つの小円孔を穿ったものである。Ⅰ類は2点, Ⅱ類は1点である。

Ⅰ類 (No.19) 口径6.6cm, 器高19.7cm, 胴径10.5cm, 頸径3.4cm, 頸高8.3cm, 底径8.6cm, 台高4.3cm。胴のはった浅い体部に口縁がやや外反する細長い口頸部をつけ, かなりの高さをもつ台部を貼り付けている。右への巻き上げによって体部がつくられ, 左回転を利用して成形している。体部下半には4回のヘラ削りがみられ, あとはヨコナデによっている。また, 体部に2条ずつのヘラ描沈線にはさまれた櫛描の列点文帯がめぐっている。頸部内面には回転方向及び縦方向への荒いヘラ削りを残している。台はあとから接合したもので, 内面に粘土を貼り付けた痕跡をとどめる。台は長方形の透かし窓を穿ち, その下で段をつくり, ヨコナデによる2条の沈線をめぐらしている。

Ⅱ類 (No.20) 口縁部を欠損しているため, 口径・器高・頸高は不明。胴径11.6cm, 底径10.2cm, 台高2.5cm, 頸径3.9cm。体部は肩のはった形をなし, 胴部にヘラ描沈線とその間にⅠ類と同じ文様帯がめぐっている。台部は端部が丸くなり, 径4mmの小円孔が3つ穿たれており, 体部に貼り付けている。頸部にも沈線をめぐらし, 内面には荒いヘラ削りがみられる。体部下半はヘラ削りによっているが, 他はヨコナデで調整している。

### 提瓶 3 (No. 21)

耳の形などから2類に分けられる。Ⅰ類は耳が環状につく形で, Ⅱ類は耳が鉤形となる形である。

Ⅰ類 (No.21) 口径7.6cm, 器高25.9cm, 胴径20.8cm, 厚さ17.4cm。胴部の厚みは大きく, 球形に近い形になる。表面の磨滅がひどく, 明確には観察しかねるが, 少なくとも片面で7回のヘラ削りが認められる。頸部と肩部にヘラ先状沈線を1条ずつめぐらしている。また, 耳は長さ4.1cm, 厚さ2cmのもので肩部に環状に貼り付けている。

Ⅱ類 口縁端を欠いており, 口径等不明。胴径18.5cm, 頸径4.5cm, 厚さ13.2cm。Ⅰ類に比べるとかなり薄い形となる。頸部にヘラ描沈線を1条めぐらす。耳は破損しており, 明確な形はわからないが, Ⅰよりも退化した形であると考えられる。

### 甕 2 (No. 22~23)

いずれも口縁片である。No.22は径19.7cm, No.23は23.7cmである。No.22は外面カキ目に平行叩き目を加え, 内面に径3cmの青海波文が認められる。

### 蓋 1 (No.24)

台付壺の蓋と考えられるが, 組み合わせるものが見当たらない。口径6.9cm, 器高3.7cm, 稜径10.3

cm。返りが内傾し、天井部がやや高くなる形である。左方向に巻き上げ、右回転を利用して成形している。天井部はヘラ削りしたあと、つまみをつけている。幅1.8cm、高さ1.2cmのものである。口縁端部はヨコナデ調整で仕上げ、内面を上にして焼成している。

以上、須恵器について観察してきたが、これらを整理してみたい。各器種で分類してきたように、大体2つの時期が想定できる。1つは、坏Ⅰ類・有蓋高坏Ⅰ類・無蓋高坏Ⅰ類・罎Ⅰa類・長頸壺がこれに該当すると考えられる。もう1つの時期は、坏Ⅱ類・有蓋高坏Ⅱ類・無蓋高坏Ⅱ類・罎Ⅱ類・台付長頸壺が該当すると考えられる。従来行われている編年にしたがって、前者は6世紀後半、後者は7世紀前半ということで把握しておきたい。坏・高坏のセット関係や細分類などまだ明確にしない点が多いが、今後に期したい。

#### 土 師 器 (第9図 No.25)

高坏の脚片が2点出土している。いずれも表面の磨滅がひどい状態である。No.25高坏は褐色を呈するもので、基部に1条の沈線をめぐらす。脚径7cmの断面円形の脚部で、かなり大きな破片を想定できる。

#### 馬 具 (第10図 1～4)

鏡板、引手、鉸具、飾金具などがある。なかには、金銅製のかなり優れたものがみられる。

**鏡 板** (第10図1) 鉄製素環の鏡板と思われるものが4点ある。腐蝕がひどく手にすることも出来ないほどで、立聞などの部分が明瞭でないが、大きさ、形態などから一応鏡板としておきたい。No.1は、7.1cm×6.6cmのやや楕円形を呈する。断面は、巾1.3cm、厚さ0.5cmの板状である。他の3点も形態、大きさなどほとんど同じである。

**引 手** (第10図2) 鉄製である。長さ16cm、片方を欠いている。径2.5cmの円環部に長さ8.1cmの鉄棒がつく。断面は隅丸の方形を呈する。この他に鉄棒破片1点がある。

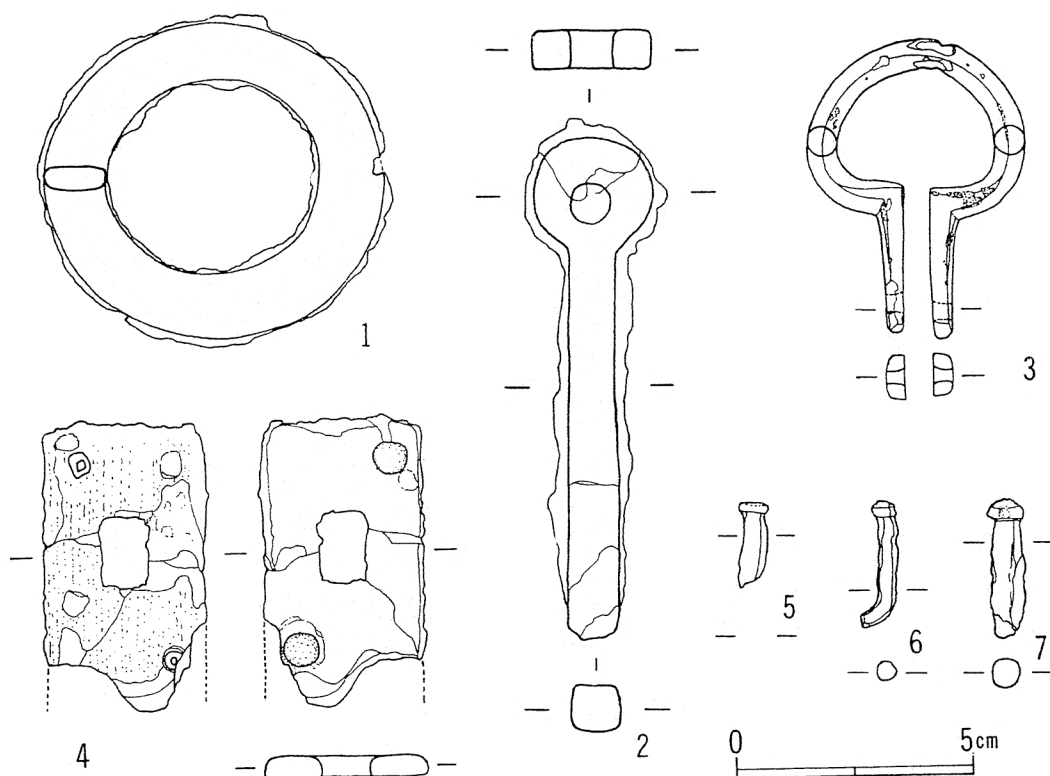
**鉸 具** (第10図3) 鉄地金銅製の鉸具である。全長6.3cm、円環部は巾4.6cmで断面は径0.6cmの円形を呈する。基部との接合部で稜線がみられるようになる。基部は内側が平坦で平行につくられ、外面は丸味を帯びている。基部先端両側には0.3cmの円形の孔があけられている。この孔はその位置に左右若干のずれがみられ、また内側が巾広となっている。

**飾金具** (第10図4) 鉄製の方形飾金具であろうか、裏面に木質部の腐着がみられる。径0.7cmの円形鉄製鋌で留められ、鋌先端は折れているが、裏面に0.7cmほど突き出ている。残存部の長さ6cm、幅3.3cm、0.4cmである。断面は板状で、裏面はとくに平坦である。同様な破片が他に2点ある。

この方形飾金具のほかに、巾1.1cmの帯状の鉄地金銅製の飾金具と思われるものが2点ある。この飾金具のうち1点は、頭部が径1cm、高さ0.7cmの円形鋌で2ヶ所留められたものである。

#### 鉄 製 鋌 (第10図5～7)

太鼓塚石室内から出土した鉄製品が16点ある。そのうち鋌と思われる破片が13点で、他は不明である。頭部を有する鉄製鋌3点がある。頭部はいずれも円形で、その径はNo.5が0.6cm、No.6が0.5cm、No.7が0.7cmである。No.5のみ頭部に凹みがみえる。これらの大きさは3cm前後で、断面は円形である。



第10図 段ノ塚穴出土遺物 (3) 馬具 1～4 鉄製鍼 5～6

#### 埴輪 (第11図)

円筒埴輪の破片である。  
復元直径は26cmである。厚さ1.5cm, タガ部分で2.2cmの厚さである。胎土は砂粒を含まず良好で, 赤褐色を呈する。タガ部分がナデを施しているほかは, たて方向のハケ目に斜め方向のハケ目調整をしている。内面はたて方向にユビナデが全面にみられる。



第11図 段ノ塚穴出土遺物 (4) 埴輪

註1 笠井新也「阿波国古墳概説」『考古学雑誌』4巻4号 1913年  
笠井新也「阿波国美馬郡段の塚穴」『人類学雑誌』37巻5号 1922年

## 2. 北岡東・西古墳

所在地	東古墳 阿波郡阿波町北岡252の2 西古墳 阿波郡阿波町北岡74の2
所有者	東古墳 細川信助 西古墳 鎌田 肇
管理者	阿波町教育委員会
県指定年月日	1954年8月6日
調査期間	西古墳 1975年3月9日～26日 東古墳 1976年3月14日～25日
調査協力	阿部洋一・天羽由美子・太田洋子・岡本坦・岡山真知子・樫原壮宜・片岡芳彦・ 小林勝美・篠原広志・角地博・滝山雄一・多田寿一・中東佳代・松永住美・松永 雅行・三好文子 阿波町教育委員会・阿波町文化財保護委員会 岩佐敬二・鎌田肇・細川信助

### 1. 遺跡の位置

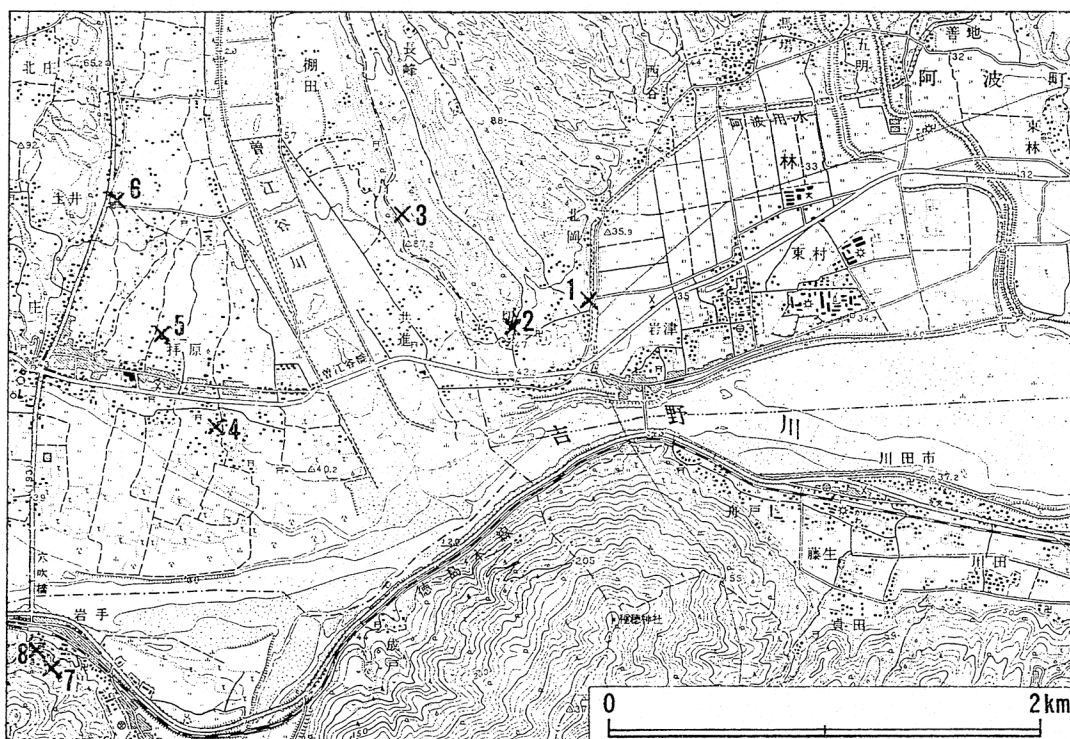
北岡東・西古墳は、段ノ塚穴型石室の分布の東限に位置する。行政区画では、北岡東古墳は阿波郡阿波町北岡252の2、北岡西古墳は同町北岡74の2に属する。

両古墳は、北から南に延びる広大な扇状地の先端部に位置し、南に開口している。前面には吉野川が流れるが、ちょうどこの地点は喉元部にあたり、ここから急に川幅を広げて東流し、兩岸に沖積平野を形成する。

東古墳は扇状地の東南端に立地し、西古墳は西方向に約350m隔てたところにある。西古墳は東古墳より一段高い段丘面に立地する。両古墳周辺には、数基の古墳があったと伝えられるが、今のところ、その実態はまだつかめていない。西古墳から約750mほど北西に登ったところに、長峰古墳（仮称）がある。

長峰古墳は、今まで遺跡地名表や町史にも記載されておらず、西古墳を調査していた時、川井豊吉氏にご教示していただいて確認したものである。長峰古墳の墳丘は、開墾によってほとんど破壊され原形をとどめない。玄門石と思われる緑泥片岩の立石が南面して東西に位置し、その間隔は1.3mである。この立石から左右に、玄室の側壁と考えられる積み石が北側に延びている。石材はすべて砂岩栗石である。天井部分はすでに崩壊している。残された石材からみると天井石も砂岩を使用していたようである。玄室は4m前後と推定できる。立石から南側は削平されているため、羨道部は完全に破壊されたものと思われる。

時代は遡るが、この地域から吉野川北岸に発達する河岸段丘や扇状地上には、点々と旧石器の遺跡が存在する。いずれもナイフ形石器を主体とする遺跡である。旧石器に関しては、筆者がすでに紹介しているので参照されたい。註(1)

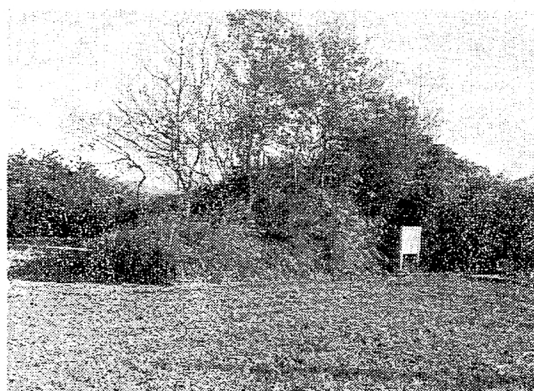


第12図 北岡東・西古墳と周辺の主な古墳（2万5千分の1，『脇町』）

1. 北岡東古墳 2. 北岡西古墳 3. 長峰古墳（仮称） 4. 東拝原古墳  
5. 中拝原古墳 6. 北原古墳 7. 戎古墳 8. 尾山古墳

## 2. 墳丘とその現状

両古墳とも墳丘の保存状態は最悪といってよい。どちらかといえば東古墳の方がまだ良い。

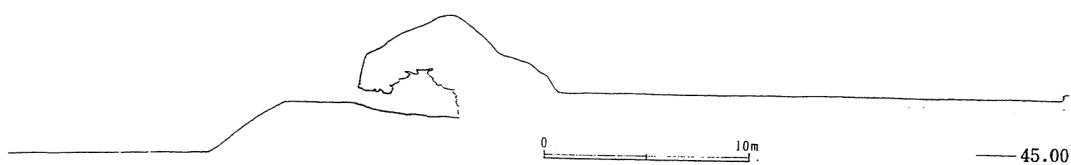
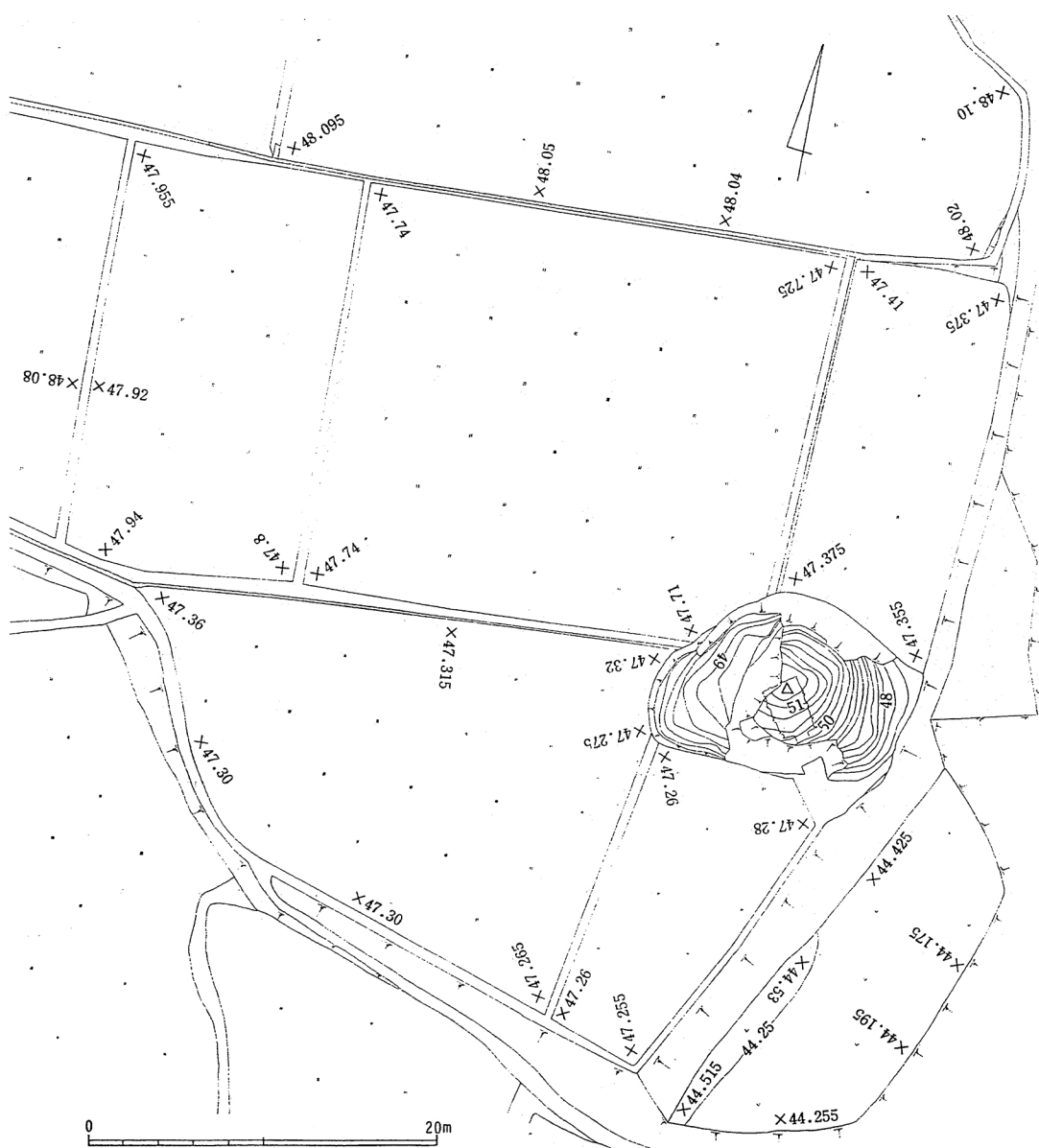


第13図 北岡東古墳の墳丘 西側より見る

まず東古墳からみる。東古墳は北から南に下がる扇状地の東南端にあたり、墳丘のすぐ東側から南半分は崖となっている。ここからは、東に開ける吉野川流域を一望のもとに見渡すことができる。東側に広がる水田面との比高は約12mである。墳丘の周辺は民家もなく水田や畑が広がっている。

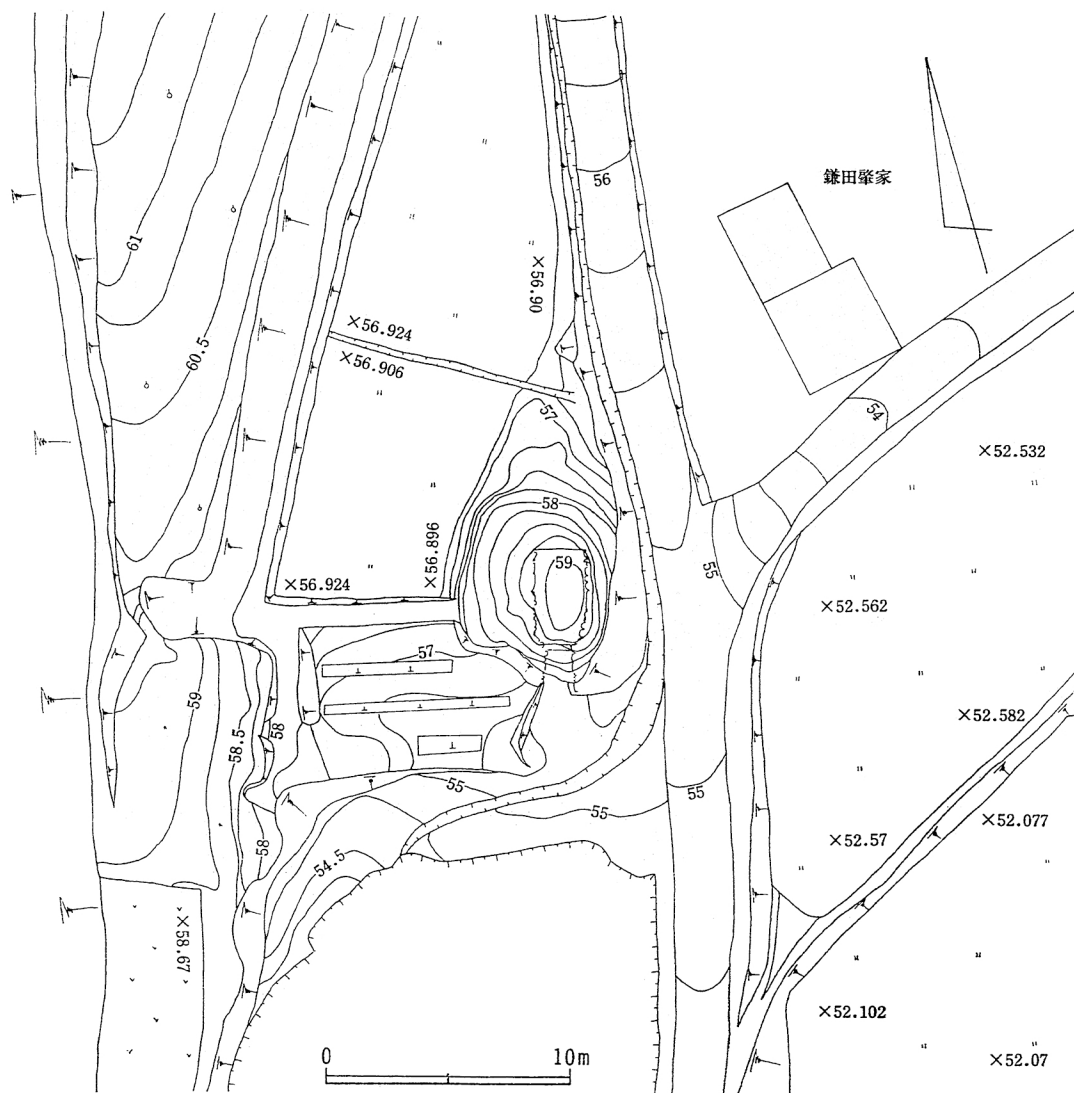
墳丘は直径15m前後、高さ約5mの円墳と推定される。原形をとどめているのは東斜面だけで、北側、西側いずれも崩壊がひどい。墳頂部は標高

51.40mで、四周との高さを比較してみると、南側、西側の水田で4.1m、北西部で3.7m、北側で4.0mとなる。仮りに床面レベルを46.40mとすると墳頂部とは5mの差がある。現状でみると、まわりの水田は床面より約1m高い。墳丘と石室の関係図は第14図、第15図に示した。それをみると墳頂部は奥壁中央部と同じ位置らしく、段ノ塚穴の場合と似ている。

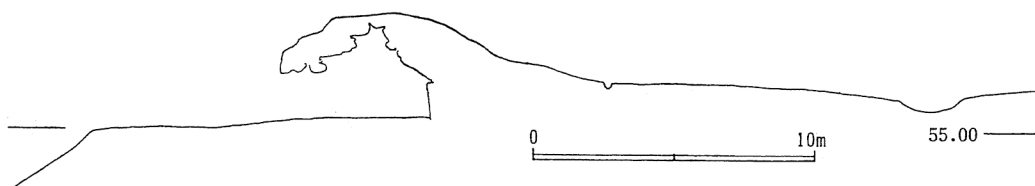




つぎに西古墳であるが、ここからの眺めも 東古墳同様すばらしい。両者の距離は約 350mである。墳頂部の標高は59mで、両墳頂部の標高差は 7.6mと西古墳が高い。西古墳の床面レベルを 55.40mとすると、床面レベルの標高差は 9 mである。



第16図 北岡西古墳墳丘図 (等高線25cm, 単位m)



第17図 北岡西古墳墳丘断面図



第18図 北岡西古墳の墳丘  
北側より見る

西古墳は、段丘の東斜面に形成されたテラス状の地形を利用して築造されている。封土の流失は激しく、東側は町道によって削り取られ、石室の側壁が露出している状態である。このため、石室も全体に東に大きく傾いている。現状のまま放置すれば、石室が崩壊するのは、時間の問題である。墳丘の原形がうかがえるのは、北斜面から西斜面にかけてである。墳頂部はやや平らになっている。羨道部の西側一帯は墓地となり、その前方には溜め池が築かれ、周辺の地形もかなり変わっている。

床面レベルと墳頂部との差は、3.6mである。墳頂部と北側水田との比高は、2.1mしかない。封土が流失していることからみて、墳丘は4m前後の高さであろう。直径は、北側や西側の堀の状況から復元して10m前後とみられる。墳丘と石室の関係は、現状でみるかぎり墳頂部が玄室中央部と一致する。

(第16図、第17図参照)

### 3. 石室の構造と規模

同じ地域で、しかも近接した古墳であるにもかかわらず、両古墳はまったく異なった印象を与える。それは、東古墳が緑泥片岩を用いた石室であるのに対し、西古墳が和泉砂岩を用いた石室ということにもよるのであろうが、両者はいろいろな点でも異なっている。

まず東古墳からみると、とくに玄門部を構成しない両袖式の横穴式石室である。現状で全長5.26mとなるが、羨道部入口が埋没しており、さらに長くなるものと思われる。石室主軸線はN—32°—Wで、ほぼ南東に開口する。

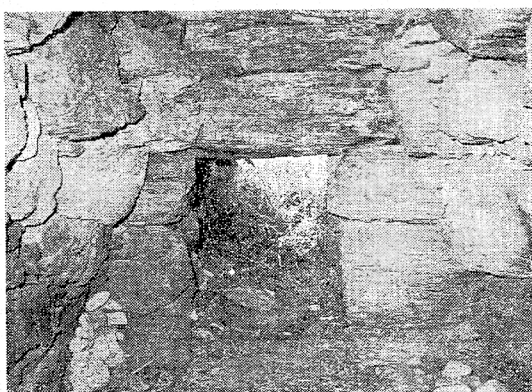
石室の石材は今も述べたように緑泥片岩を用いて小口積みとし、若干つめ石に砂岩の円礫を用いている。緑泥片岩は天井石、側壁、奥壁を問わずほとんどが河原石で、壁面を平らな小口面で築いている。玄室に用いられている石材は、大きなもので1m、もっとも多いのが70～80cm大で、小さいもので40～50cmの河原石である。羨道部はやや小さくなり50cm前後のものをを用いている。壁面で見る限り、割り石など加工して用いたものは見当たらない。

奥壁は巾2.05m、高さ1.3mである。奥壁最下段の抜き取りは盗掘によるものである。奥壁は最下段右隅の石を除いて、両側壁にはさみ込まれるような格好になっている。

天井部は奥壁側から2枚、羨道部側から3枚構築し、中央部で最後に1枚架けている。使用された天井石からみると、天井面を整えるという意識はうかがえない。そのことは、両側壁が1m前後の高さから壁面を意識して積み上げていないことからいえる。羨道部3枚の天井石は玄室側がやや低くなる。段ノ塚穴型石室では、玄門部の天井が羨道部天井よりも一段低いのが多いが、ここでは玄門部を構成しないためその例にもれる。

天井の高さは、床面を標高46.40mラインとして、玄室中央で2.24m、羨道部玄室側1枚目天井石で1.05m、入口の天井部で1.17mと若干上がる。

つぎに平面プランをみよう。羨道部入口は土砂の流入が多く、かがみ込まないと入ることができないほどで、床面の状況は明確につかめない。玄室に接する部分で巾は0.75mである。そして玄室部で左右とも50cmの袖部を形成している。その位置は左右同じではなく、右袖部が20cmほど奥壁より位置している。右袖部から奥壁までの玄室長さは2.9m、左袖部からは3.1mとなる。玄室巾は、袖部端と側壁との交点で計ると1.78m、玄室中央最大巾2.05m、奥壁巾2.02mである。袖部から中央部に広がりをもせるプランである。奥壁1に対して側壁は約1.5の比率となる。



第20図 北岡東古墳の玄門部

左右の側壁の持ち送りをみると、床面最大巾2.05mであるのに対し、天井部中央での側壁巾は0.75mと約3分の1近くも狭くなっている。

床面は、あちらこちらさかんに盗掘されたり、掘り荒らされているが、こぶし大の砂岩礫がかなり多く散乱している。これが床面の敷石かどうか判断しかねる。開口されたのがかなり古く、ここから出土した遺物はまったく不明である。

つぎに西古墳の石室をみよう。石室内部は穴観音が祭られ、いつも美しく清掃されている。この石室は、玄室が東側に大きく傾き、また玄門部と羨道部を完全に積みかえていることから原形を復元するには困難なことが多い。玄門部と羨道部の修復は15年ほど前に行なわれたとかで、当時の様子を聞くと、西側玄門石は東に倒れ、天井石も崩れ落ちていたという。したがって第21図に示した玄門石、玄門部天井石、羨道部天井石、羨道部両側壁はすべて積みなおしたものであることを注意しておきたい。現在、羨道部側壁は積み石と積み石の間をセメントで完全に塞いでいる。ただ、玄門部にある一枚の板状の敷石と、羨道部最下段の側壁は、原形をとどめている可能性がある。

石室に使用されている石材は、奥壁、天井石、玄門石、玄門部敷石が緑泥片岩の河原石であるのに対し、側壁は和泉砂岩の栗石を主体にとりどころ緑泥片岩を用いている。

奥壁は、高さ1.28m、幅1.9m（実際はそれ以上の石）の一枚石をいわゆる鏡石として前かがみに据えている。この奥壁に直接天井石を斜めに載せる。奥壁と天井石の接する壁面に空間が出来るが、その部分は横長の割り石をうまくはめ込んでいる。奥壁側からは三枚の天井石を、玄門部側からは二枚の天井石をそれぞれ中央部に持ち送っている。ほぼ玄室中央部に水平に最後の一枚を架ける。それぞれ一枚目の天井石はとくに大きく、表面で見える長さだけでも1.7mほどである。奥壁側一枚目天井石の持ち送っている角度は35°で、玄門部側のそれと比べると傾斜は急である。これは一枚目天井石の下端部の高さが、80cmほど玄門部側が高いことによるものと考えられる。奥壁側の天井石が一枚多いのも同じ理由であろう。玄室中央の天井までの高さは3.2mである。

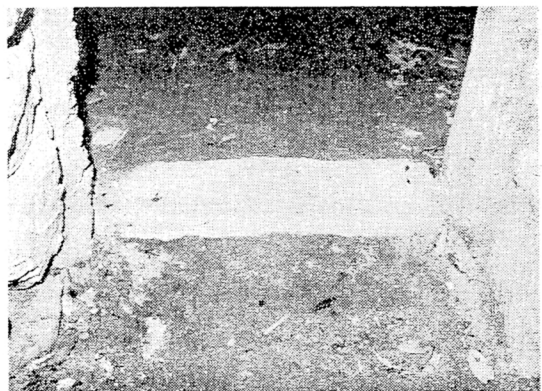
側壁は砂岩の栗石を主として用いているが、大きいものでは70～80cm、30～50cmのものをもっとも多く使用している。大きな石は中央から奥壁にかけて多く用いる。床面から2.2cmあたりで積み石が

変わっているようで、それから上は30cm前後の石を選んで築いている。

側壁の横断面図をみると、東壁は床面から2mの高さまで直立した状態となっている。かなり西壁の圧力で起こされたのであろう。平面プランの主軸線から推定すると、30cm前後天井部全体が東に移動している。

平面プランは、ちょうど羽子板の形に似る。玄門部から中央にかけて広がり、中央部から奥壁にかけてほぼ平行線をたどる。奥壁での巾は1.9m、中央で2.1m、玄門部と側壁の交点での幅は1.42m、玄門部での幅1.1mである。羨道部は修復されているため明確ではないが、最下段の積み石が原位置にあるとすれば、入口の方が広く、玄門部に近づくにしたがって狭くなる。この場合だと、太鼓塚の形態に似る。現状では羨道部は長さ1.58mであるが、玄室の規模からすれば、本来4m前後はあったと考えられる。玄室の長さ3.85m、玄門部の長さ0.4mである。

西古墳でとくに留意しておきたいのは、玄門部床面に一枚の敷石がみられることである。この敷石は巾0.28m、長さ1.1mで左右の玄門石に接する。厚さは不明であるが石の様子からみて、10cm以内であろう。このような敷石は、県内では知らない。岡山真知子氏の調査によると、註(2)段ノ塚穴型石室のなかに、ちょうど組み合わせ式石棺の側板のように二枚の石を立て、玄門石を前後にはさむ格好で玄門部を間仕切りした施設をもつものがある。その例は、野村八幡古墳や三島西古墳、江ノ脇古墳などでみられる。



第22図 北岡西古墳 玄門部敷石

西古墳の場合、玄門部の崩壊がひどかったことからして、修復時に水平に置きかえられた可能性も強い。いずれにしても、発掘によらなければ結論は出せない。

最後に遺物についてであるが、この古墳も古くから開口していたらしく、地元では枕貸し伝説など伝えられることから多量の須恵器が出土したと思われるが、今日まで保管された出土品はまったくない。したがって築造された年代は、明確ではないが、石室の形態から一応6世紀後半に位置づけておきたい。

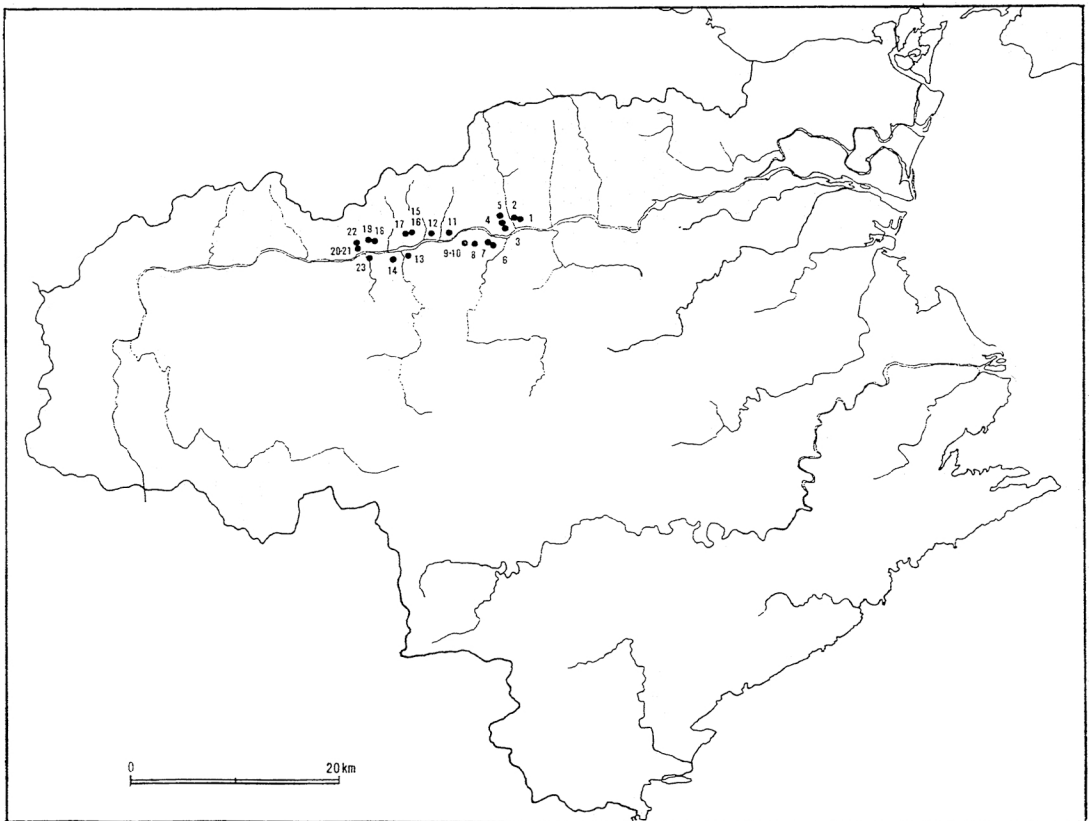
註1 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』第3巻 雄山閣 1976年

註2 岡山真知子『段ノ塚穴型石室の研究』（1974年度徳島県博物館学術奨励金交付研究による提出論文）

### 3. 段ノ塚穴型石室について

今まで、報告してきた4つの古墳は、いずれも段ノ塚穴型石室の代表例である。段ノ塚穴型石室については、前掲書『徳島県博物館紀要』第4集で、その特徴や分布、編年について述べておいた。また、この研究を長年ともにしている岡山真知子氏の『段ノ塚穴型石室の研究』（1974年度徳島県博物館学術奨励金交付研究による提出論文）がある。これらの研究をふまえ、ここでは今回の調査成果をもとに、二、三の問題点をあげ、今後の研究課題を述べておきたい。

段ノ塚穴型石室とは、天井を前後から、側壁を左右から持ち送ったいわゆる穹窿式の天井を持ち、平面プランが胴張りまたは末広りの横穴式石室のことである。ここに報告した段ノ塚穴は、まさにこれらの特徴を集約した、もっとも完成されたものといえる。しかも、このような石室が、はやくから笠井新也氏によって指摘されているとおり、美馬郡周辺にしかみられない。行政区画でいえば、美馬郡と阿波郡阿波町の西部の吉野川沿岸の地域に限られるのである。私たちが、今までに確認した古墳は23基24石室で、三島西古墳が前方後円墳（前方部1石室、後円部1石室をもつ）の可能性をもつほかは、すべて円墳である。これらの内容については、第1表段ノ塚穴型石室一覧に掲げたとおりである。第23図段ノ塚穴型石室分布図をみると、徳島県内における位置づけが明確になるであろう。



第23図 段ノ塚穴型石室分布図 番号は第1表の遺跡番号と同じ



第 1 表

## 段ノ塚穴型

番号	名 称	所 在 地	全長	玄 室			玄 門 部			羨 道 部		
				長	幅	高	長	幅	高	長	幅	高
			m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
1	県史跡 北岡東古墳	阿波郡阿波町字北岡115の2	5.26	3.10	2.05	2.24				2.16	0.80	1.17
2	県史跡 北岡西古墳	阿波郡阿波町字北岡74の2	5.83	3.85	2.10	3.20	0.40	1.10	—	1.58	1.34	—
3	東 拝 原 古 墳	美馬郡脇町江原拝原2473の2	5.72	3.86	2.50	2.70	0.90	0.80	—	0.96	0.90	—
4	中 拝 原 古 墳	美馬郡脇町江原拝原1081	6.40	3.60	2.33	2.97	0.60	0.75	—	2.20	1.20	—
5	北 原 古 墳	美馬郡脇町江原拝原466	6.94	3.94	1.70	2.40	0.20	0.94	0.95	2.80	1.30	1.20
6	戎 古 墳	美馬郡穴吹町字戎55	—	3.82	2.40	1.86	—	0.47	—	—	—	—
7	尾 山 古 墳	美馬郡穴吹町字尾山	—	3.82	2.32	—	—	1.15	—	—	—	—
8	三 谷 古 墳	美馬郡穴吹町三谷	4.62	2.02	2.01	2.34	1.08	0.67	1.18	1.52	0.84	—
9	三 島 東 古 墳	美馬郡穴吹町三島	5.60	1.95	2.02	1.86	0.65	0.73	0.93	3.00	0.80	1.05
10	三島西古墳(1号) (2号)	美馬郡穴吹町三島	5.25	2.30	2.01	1.90	0.25	0.82	1.13	2.70	1.10	1.40
11	国 中 古 墳	美馬郡脇町岩倉國中2965の2	—	2.10	1.87	1.98	—	—	—	—	—	—
12	野村八幡古墳	美馬郡脇町岩倉宮の下4144	8.95	3.85	2.40	3.05	0.60	1.00	1.40	4.50	1.40	—
13	江ノ脇古墳	美馬郡貞光町江ノ脇	5.77	2.17	1.74	2.24	0.55	0.70	1.64	3.05	1.01	1.54
14	西 山 古 墳	美馬郡貞光町西山	—	2.03	1.80	1.58	—	0.34	0.86	—	—	—
15	国史跡 段ノ塚穴太鼓塚	美馬郡美馬町坊僧373,374,363-2	13.10	4.60	3.38	4.25	0.80	1.30	1.75	7.70	2.35	2.45
16	国史跡 段ノ塚穴棚塚	美馬郡美馬町坊僧368	8.65	4.50	1.95	2.80	0.45	0.85	0.92	3.70	1.20	1.54
17	真 鍋 塚	美馬郡美馬町宗重49	—	3.90	2.15	2.30	0.45	0.90	1.10	—	1.35	—
18	荒 川 古 墳	美馬郡美馬町荒川	8.75	3.45	2.60	2.75	1.40	1.00	0.95	3.90	0.90	—
19	海 原 古 墳	美馬郡美馬町西荒川86	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20	八 幡 1 号 墳	美馬郡美馬町八幡	5.75	3.85	2.25	2.50	—	—	—	1.90	0.90	—
21	八 幡 2 号 墳	美馬郡美馬町八幡	4.95	3.00	2.20	2.45	—	—	—	1.95	0.75	—
22	大 国 魂 古 墳	美馬郡美馬町城	4.35	2.15	2.30	2.10	1.00	0.90	0.70	1.20	0.95	—
23	小野天神古墳	美馬郡半田町小野天神	4.00	—	2.35	2.16	—	—	—	—	—	—

## 石 室 一 覧 表

玄 門 部 の 構 造	奥 壁	石 棚	玄室天井 石の構成 (奥壁側×最高部 ×玄門側)	玄室の プラン	側 壁 の 石 材	床 面
第1類型	片岩割石と砂岩積み石	な し	2×1×3	C 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
第3類型	一枚石	な し	3×1×2	B 型	砂 岩 の 栗 石	不 明
第2類型	砂岩の積み石	な し	2×1×4	C 型	砂 岩 の 栗 石	不 明
第2類型	一枚石をおき, その上に 4段の積み石	な し	3×1×3	C 型	基盤に片岩割石 あとは砂岩栗石	不 明
第3類型	一枚石	な し	3×1×2	C 型	砂 岩 の 栗 石	敷石か?
第2類型	片岩の割石積み	な し	1×2	C 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
不 明	片岩の割石積み	な し	不 明	不 明	片 岩 の 割 石	不 明
第2類型	一枚石	な し	2×1×2	B 型	片 岩 の 割 石	不 明
第2類型	片岩の割石積み	な し	3×1×2	B 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
第3類型 不 明	片岩の割石積み 片岩の割石積み	な し な し	2×1×2 2×1×2	C 型 不 明	片 岩 の 割 石 片 岩 の 割 石	敷石か? 不 明
不 明	砂岩の栗石積み	な し	3×1×1	C 型	砂 岩 の 栗 石	不 明
第3類型	一枚石	奥行80cm 厚さ40cm	2×1×2	A 型	砂 岩 の 栗 石	敷石か?
第3類型	一枚石	な し	1×1×1	C 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
不 明	片岩の割石積み	な し	2×1×2	C 型	片 岩 の 割 石	不 明
第3類型	片岩の割石積み	な し	3×1×3	B 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
第3類型	一枚石	奥行80cm 厚さ15cm	2×1×2	C 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
第3類型	一枚石	な し	3×1×2	C 型	片 岩 の 割 石	不 明
第2類型	一枚石	奥行78cm 厚さ15cm	3×1×4	C 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
不 明	一枚石	奥行85cm 厚さ20cm	2×1×2	C 型	砂岩の栗石主体 片岩も使用	不 明
第1類型	3枚の片岩を横に並列 その上に片岩の割石積み	奥行80cm 厚さ15cm	3×1×3	C 型	片 岩 の 割 石	敷石か?
第1類型	砂岩の積み石, その上に 片岩の割石積み	な し	2×1×2	C 型	下半…砂岩の栗石 上半…片岩も使用	不 明
第2類型	砂岩の割石積み	奥行30cm 厚さ8cm	2×1×2	B 型	下半…砂岩の栗石 上半…片岩の割石	敷石か?
不 明	不 明	あ り 細詳不明	3×1×2	不 明	片 岩 の 割 石	不 明

本表は『徳島県博物館紀要』第4集に掲載したものを加筆・訂正したものである。

(天羽 利夫・岡山真知子 作成)

これらの古墳は、地域的にみて、4グループに分けて把握している。Ⅰグループ（1～5）、Ⅱグループ（6～10）、Ⅲグループ（11～17）、Ⅳグループ（18～23）である。個々のグループにおいても、細分が可能であるし、それぞれグループ内での共通点もみられる。

私たちは、これら石室の変遷を把握するために、玄門部の構造上の違いによって、3型式の分類を試みてきた。第1類型は、玄門部をとくに構成しないもの。ここに報告した北岡東古墳がそれである。第2類型は玄室入口手前で仕切り程度の板状の立石をもち、立石から玄室までの側壁を若干張り出して玄門部を構成するもの。第3類型は、太くて巾広い立石のみによって玄門部を構成するもの。太鼓塚、棚塚、北岡西古墳がこれに含まれる。

一方、玄室のプラン（胴張りの程度）による分類も併行した。aは奥壁巾、bは最大巾、cは玄門部と玄室側壁との接点間の巾として、A型は $b > c = a$ 、C型 $a = b > c$ 、B型はA型、C型の中間をいう。

この分類をもとに、一応第1類型→第2類型→第3類型という変遷を考えているが、そのカギを握っている北岡東古墳は、伝えられる遺物もまったくなく最終的には発掘調査によらなければならないだろう。

この第1類型はもとより、この石室の初源を探るうえで、第2類型Bに注目しておきたい。三谷古墳、三島東古墳、大国魂古墳の3例がある。このタイプの石室は、玄室の長さとしがほぼ等しいか、または玄室巾が玄室の長さより大であるプラン、つまり正方形ないしは横長方形プランである。この形態のもつ意義は、段ノ塚穴型石室の出自を探るうえで必ず例となる岩橋千塚型石室との共通点を見出す点においてである。また大国魂古墳では、石棚のあり方を探るうえでも重要である。

棚塚に見られるような石棚は、徳島県内では段ノ塚穴型石室だけに限られ、24石室中7例があげられる。なかでも、古い形態とみられるのは、この大国魂古墳の石棚で、奥行わずか30cm、厚さ8cmで奥壁と天井部の接点に設けられ、たとえば物を置くにしてもあまり空間がない。他の5例は奥行80cm前後で広い。これらの石棚は、側壁構築時に組み込まれ、奥壁には組み込まれない。その位置は奥壁最高部である。石室完了後、附設したものはない。

つぎに、北岡西古墳にみられる玄門部敷石について考えてみたい。北岡西古墳の項でも述べておいたように、北岡西古墳のような例は他に見当らない。玄門部に間仕切り石をもつ例は、野村八幡古墳、三島西古墳、江ノ脇古墳の3例がある。この施設は、二枚の板石を立て玄門石を前後にはさみ込む状態のものである。この施設をもつ石室は、いずれも第3類型である。しかし北岡西古墳の場合は、平らに敷いたもので、まずこれが原位置にあった状態なのかが問題となるであろう。原位置にあったものとするれば、岩橋千塚（和歌山市）でみられる玄門部床面の基石にやや似た点が指摘できる。今のところ、構築方法などにおいてまったく同じにつくられた基石の例は、段ノ塚穴型石室のなかには見出せない。

段ノ塚穴型石室に関して、まだまだ解明されていない問題は多い。近いうちに岡山真知子氏とともに、この研究の集大成を発表する予定でいるので、詳しくはそれを待っていただきたい。



## 4. 今後の課題

段ノ塚穴型石室の研究をすすめていくうえで大きな課題は、徳島県の後期古墳のなかにいかに意義づけるかである。この特異な石室を営造した集団は、いったいどのような集団であったのか。

この段ノ塚穴型石室を追いつづけていくうちに、この集団と隣接する麻植郡内に、天井部のきわめて似かよった横穴式石室が存在することが明らかとなってきた。

天井部の構造は、段ノ塚穴型石室のごとく前後から持ち送ったもの、持ち送らないがドーム状に曲線を描くものとの2種類が見られる。段ノ塚穴型石室ほど天井部は高くなく、持ち送りもあまり急ではない。段ノ塚穴型石室と明確に異なる点は平面プランで、必ず隅丸のプランを形づくることである。私たちは、忌部山古墳群（麻植郡山川町山崎字忌部山123番地）を標式にして、「忌部山型石室」と仮称して追求している。段ノ塚穴に見られるような壮大な石室はないが、その反面、標高240～250mといった高所に古墳群（最高5基）を形成するのである。そして、その分布は、麻植郡内に限られるという点に重要な意味をもつ。

徳島県博物館では、1976年8月から忌部山古墳群の発掘調査に取りかかった。その目的は、この忌部山型石室を営造した集団は古代阿波忌部氏ではないか、という仮説を前提にしたものである。今までの史料では、麻植郡内は古代阿波忌部氏の本拠地として位置づけられているところである。

忌部山型石室、段ノ塚穴型石室、いずれも重要な問題を提起している。これらの実体を究明することによって6～7世紀の当地域社会の構造は、かなり明確になってくると確信していることを述べ、本稿を終えたい。

（忌部山古墳群の調査成果ならびに忌部山型石室については、次年度発刊の『徳島県博物館紀要』第9集に発表する予定でいる。）